

# 六花

り  
っ  
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada

*cover designed by masami*

3月号

貫

山田六甲

寒月や木々の根の浮く切り通し

おとなりの雨戸に当たり鬼の豆

焙<sup>ほう</sup>烙<sup>らく</sup>や箸先焦<sup>こ</sup>がし鬼の豆

男滝かたまりの雪落ちて来し

薔薇ばらの花雪を冠りて庭にあり

雪だるま頭に松葉混まぎりぬし

鑑ろう梅ばいの二枝挿さしある雪だるま

雪兎土に戻りてしまひけり

雪だるま転がしてゆく雪の上

如月の水槽に吾歪いびつなる



蹄鉄ていてつの高く響ける余寒よかんかな  
春風はるかぜや雪ゆきの匂においひを伴ともなひて  
蠟梅ろうばいの光咲かせてをりにけり  
梅の花うめゑくぼのごとく開きけり  
白梅はくばいの月下の庭に満ちゐたる  
白梅はくばいや灯ともしの消えし床の間に  
雪解川ゆきげがわいま無き橋の杭くいの跡  
耳たぶにかかるほつれ毛春灯はるともし  
息吹くや色褪あせきりし風車  
春愁しゅんしゅうは時訃ときふの針音めきゐたる

天地を一矢で(なぎ)初日の出

武田 美雪

待つといふ久しき時間初明り  
恵方より風吹ききたれ秋津島  
初釜の友に白髪を見つけたり  
襟足に雪降る吾子の春着かな

年頭を飾る初日の出の大景を印象鮮明に描きとった。  
天はあめと読み天地で「あめつち」。天と地を繋ぐように初日の出が矢のごとき光芒を放つと、国生みの神話の世界を想像させ、ものの始まりを意味する。  
武田さんの今回の作品はいずれも破綻がなく新年の風景を写生し、適度な緊張感とお正月気分を見事に詠み込んでいる。  
今回は三名が夢風撰で、秀句に出会うと主宰は嬉しいのである。

嬰ややといふ熱かたまりき塊寒の星

植込に突きささりゐる紅葉かな

すつばさが美味しい冬の苺なり

湯上りの嬰やぶこに柚子の香りけり

寒の月夫つまは赤子の乳買ひに

K O K I A

木内さんの作品とは対照的に生命の誕生を詠んだ。生まれたばかりの赤ん坊を「熱き塊」と感じたのが凄い。女性ならではの実感であろうが、このように言い切ると、男性にもこの実感を共有させる説得力がある。お孫さんを詠んだのだとすれば、対照に溺れることなく主観写生ができたことに讃辞を贈りたい。K O K I Aさんは感覚を大事にする人で、今回はそれが成功した例である。

今生の人に紅刷く寒夜かな

木内美保子

木枯の飛ばし忘れしちぎれ雲

賛美歌が流るる夜や路地時雨

波高し揺り籠のごと冬鴟

寒月が送つて呉れる白い道

今生とはこの世に生きている間を言うが、掲句は今わの際のことである。また今生の「別れの」が省略された万感胸にせまる言葉。息をひきとってゆく女性の今生の暇乞いの、最期の身だしなみの心得や覚悟が伺えるし、紅を施す人の指に伝わってくるかすかな体温が切ない。紅はもちろん寒紅で、そのまま死に化粧となるのである。

寒波来る

貝森 光洋

着膨きぶくれて人間たるを忘れおり  
宝くじ買かいた日ひには寒波来る  
去こ年ぞ今こと年し二本の足で稼ぐ巾  
山見れば父の生き様冬帽子  
真夜中の思い出し笑い福笑い

三角

梶浦玲良子

指切りのぬくみ寒暮かんぼの湖けむる  
三角の夕暮つれて冬帽子  
温泉玉子ひと日の想ひ風花す  
屈くつ託たくの傾かたむいてゐる冬ふゆの蒲がま  
梵鐘ぼんしょうの長き余韻よゐんや時とき雨あめ散る



# 雪樹集

熱き塊

K O K I A

植糸込みに突きささりある紅葉かな  
すつばさが美味しい冬の苺なり  
嬰やといふ熱き塊寒の星  
湯上りの嬰みどりごに柚子香りけり  
寒の雨夫つまは赤子の乳買ひに

恵方

武田 美雪

待つといふ久しき時間初明り  
天地を一矢いっしでつなぎ初日の出  
恵方えほうより風吹ききたれ秋津島あきつしま  
初釜はつがまの友に白髪を見つれたり  
襟足えりあしに雪降る吾子の春着かな

市田柿

池崎るり子

市田柿霧の育てる甘味かな  
捨てられぬ物ばかり増え十二月  
パン屑をついばむ群や冬日向ふゆひなた  
一晚で黄色き絨毯じゅうたん落葉路  
鉢植の葉牡丹の白輝やけり

# 六花集

山田六甲選

永田 勇

富有柿ふゆがきの煌々こうこうとして置かれたる

日付見ひつけみて深き溜息ためいき師走しゅうさかな

年忘れ憂うれさを忘れる酒さけを酌くむ

取り巻きの弾ける笑顔餅もちを搗つく

枯葉掃く笑顔たやさぬボランテイヤ

わかやぎすずめ

冬ふゆじたく 支度しどまづは車のタイヤから

幼子のお尻おつかからのやうに大蕪おおかから

子ども等にひととき夢をクリスマス

とめどなく餅搗もちきみたる丸めたる

初霜はつしもを踏みしめ前に進むなり

田尻 勝子

原点のやうに一重いちじゅうの冬薔薇ふゆそうび

空に金地に金銀杏いちじょう並木なみきかな

水底のやうな日の差す秋野あきのかな

トンネルの切れ間一瞬もみち谷

春光や水晶玉にとぢ込める

松本 蓉子

電灯の光を集め石路いしぢの花

歳月を重ね大樹おおいしの新松しんしょう子

苔こけむ生むせる茅草かやふき屋根や秋時雨

冬晴や飛行機雲の他になし

走り根に落葉かたまり合うてをり